

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652033

研究課題名(和文)英国RA会員ジェームズ・バリーの研究 十八世紀愛蘭出身カトリック画家の精神と芸術

研究課題名(英文)The Research on His Life and Art of James Barry, R. A., A Forgotten Irish Catholic Painter in the 18th Century

研究代表者

桑島 秀樹 (KUWAJIMA, HIDEKI)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：30379896

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題遂行により、日本ではイギリス文化圏でさえ、「忘れられたロイヤル・アカデミシャン」であったジェームズ・バリーについて、その生涯と作品モチーフの一端が明らかとなった。特にこの画家が、18世紀アイルランド南部都市コークに生まれたカトリックであり、同郷の「崇高の美学者」エドモンド・バークに見初められ、彼の財政的支援のもと、ロンドンそしてフランス・イタリアでの画家修業へといたった経緯は詳細に解明をみた。作品に即して言えば、「抑圧されたアイルランド」を描くその精神は、バーク美学の「崇高」とも呼応する。他方で、彼の描く歴史的人物は、解剖学的知見に裏打ちされた大陸での古代彫像研究の賜物であった。

研究成果の概要(英文)：Through this 3-year-granted research his life and works of James Barry(1741-1806), a 'forgotten' Irish Catholic royal academician in the 18th century, has been partially exposed especially to the Japanese academic world. Firstly the research focused upon the close relationship of the painter with the aesthetician and political philosopher Edmund Burke(1729-1797), who was also from Cork area, or the Barry's homeland. Burke and his family have financially supported him to study abroad in the continent.

As for Barry's works the most important motif of him was the wounded Ireland under the Penal Laws. He tried to embody the Burke's notion of the sublime(the colonial or 'Celtic' sublime) into his canvas. However, his expression was after the classical manner, which Barry had learned from his eager studies in the famous antiquities in Italy, such as Belvedere Torso at the Vatican.

研究分野：美学・芸術学・表象文化論

キーワード：ジェームズ・バリー 18世紀 アイルランド 崇高 エドモンド・バーク 芸術・美術・絵画 ロイヤル・アカデミー イギリス

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景としては、18世紀ヨーロッパにおける、美的カテゴリーとしての「崇高」の美学を、近代世界において最初に理論構築したアイルランド人エドモンド・バーク(1729-1797)にまつわる研究が発端となる。バークは、1757年(初版)にロンドンから『崇高と美をめぐる観念の起原』という書を世に問う。

このバークの「崇高」概念をめぐる導出・醸成の具体的モチーフを、アイルランド文化なかならず彼の故地南部都市コーク周辺のゲーリック・カトリックの風土(彼の母方ネーグラー族との関係)に追うなかで、バークが後にパトロンすることになった、コーク出身のカトリック画家で、いわば美術史上で等閑視されてきた「忘れられたロイヤル・アカデミシャン」であるジェームズ・バリー(1741-1806)の存在が浮かびあがってきた。

画家バリーとバークは、バークがすでに彼の崇高美学書の刊行以後、ロンドンで教養文人として名を挙げ、その後はじめてのアイルランドへの凱旋帰国をした際に出会っている。バーク(とその親族)は、若き同郷の画家をパトロンし、ロンドン、そして大陸遊学(約7年間)へと送り出すことになった。

バリーとバークの私的な交わりと、当時の18世紀アイルランド、なかならずアイリッシュ・カトリックのおかれた状況すなわち歴史的・地理的文脈を踏まえ、バリーの絵画に表象されたものを、とくにバークの「崇高」概念との関連において、読み解くことが期待されていた。

2. 研究の目的

上記のような背景を踏まえ、以下のような論点を明確にすることを研究目的に、本研究課題を練りあげ、遂行するに至った。

(1) 18世紀の「アイリッシュ・カトリック」としての画家ジェームズ・バリー(後にロンドン・ロイヤルアカデミー会員)の読み直し。

(2) 同郷の美学者であり、パトロンでもあったバーク(ならびにバーク周辺の親族)と画家バリーとの個人的コネクションのあぶり出し。特に、アイルランド南部のコーク地域の「カトリック」コネクションなど。

(3) バリーの絵画作品に表象されているものと、バーク美学のうちから導出された「崇高」概念の関連性の解明(バークとバリー両

者に現存する書簡類の詳細な分析など)。18世紀の「アイリッシュ」のおかれた抑圧状況(たとえば「カトリック刑罰法」下での文化・社会状況)の「痛苦」の表象化の問題の検討。

(4) バリー絵画の技法・様式の解明。同時代のイギリス・アイルランド画家との比較、特に18世紀アイルランド(ダブリン中心)における、美術アカデミーの形態と「学派」の形成の研究。さらには、バリーが、フランス・イタリアへの大陸留学時代に出会った古典古代の有名彫刻など、過去の巨匠による芸術作品の影響の研究(この点は、彼の残したいくつかの古典芸術研究にかんする文書から、たんなる実作者だけでなく、「美術批評家としてのバリー」という視点でも研究する必要がある)

3. 研究の方法

上記(1)~(4)に挙げた主たる研究目的を解明すべく、具体的には以下の研究方法を採った。

(1) 現地(主としてアイルランド共和国ダブリン市とコーク市など)における、バリー作品(油彩・版画)の実地調査。具体的には、ダブリンのトリニティ・カレッジ・ダブリン(TCD=ダブリン大学)、アイルランド国立美術館や市立ヒューレイン現代美術館、さらにコークの国立コーク大学(UCC)、市立クロウフォード美術館から、ロンドンの大英博物館、ナショナル・ポートレート・ギャラリー、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館まで。

(2) 現地でのバリー研究の第一人者、18世紀アイルランド文化史の第一人者たちとの、国際的な研究情報の交換・共有。具体的には、コーク大学の美術史名誉教授トム・ダン氏、トリニティ・カレッジ・ダブリン(ダブリン大学)の近代アイルランド史名誉教授ルイス・M・カレン氏、ならびに、同大学近代文化史教授ディヴィッド・ディクソン氏、そして同大学美術コレクション担当学芸員キャサリン・ジルトラップ氏、アイルランド国立美術館(NGI)学芸員ブレンダン・ルーニー氏など、である。

(3) 上記による現地調査・研究交流によって得られた貴重情報・資料をもとに、アイルランド本国(もしくはコーク周辺のせまい地域)でしか入手困難な、地方郷土史や国内学会誌の閲覧・複写収集(調査からの帰国後、こうした国際交流によるコネクションを利用し、「アイルランド18世紀学会(ECIS)」の発行する、国内では入手しがたい学会誌バ

ックナンバーも資料として収集できた)。たとえば、トリニティ・カレッジ・ダブリン図書館でのコーク地方の郷土史バックナンバーや 18 世紀アイルランド画家関連の貴重研究書の複写。アイルランド国立博物館でのバリー没後すぐの最初期の伝記本の筆写など。あるいはまた、ダブリンのヒューレイン現代美術館やロンドン・ナショナル・ポートレイト・ギャラリー、大英博物館等での所蔵作品の「履歴/入手経路」等詳細の確認。

4. 研究成果

上記「研究目的」(1)～(4)に即して、成果を述べたい。

(1)これにかんしては、数回の国内学会(広島、滋賀、京都など)での日本語発表と1件の大部な大学紀要論文に結実した。この紀要論文(下記詳細参照)は、本邦では初の画家ジェイムズ・バリーの詳細な紹介論文となったと思われる。

(2)これにかんしても、上記大学紀要論文(主としてパークの肖像画群をあつかっている)と別の1件の国内学会誌への投稿掲載論文(パーク美学の醸成・発展研究)において、かなりの程度記載・紹介できたと思う。

(3)と(4)これら2点についても、同様に、上記紀要論文にて主要論点は記載できたと思うが、まだ現地調査できたバリーの作品(おおきな油彩の「歴史的な神話画」やその実験的版画群)すべてにわたる言及はできていない。ただし、2回の国内(広島)での日本語発表と1回の韓国での国際学会での英語発表(最終報告書は「印刷中」)のなかで、その一端は明らかにできたと思う。

当初の研究計画ではさらに、この「忘れられた画家」バリーをめぐる人物と作品の包括的な紹介書籍の刊行や回顧展の下準備なども構想されていた。これらの計画を遂行していくためには、さらなる「資金援助(助成金などの獲得)」と「収集資料整理」の時間を要すると思う。むろん、日本国内の展覧会開催可能な、公立美術館・博物館、あるいは、私立のミュージアムなどの専門研究員(学芸担当者)との折衝も不可欠となろう(こんかいの研究課題遂行中には、静岡県立美術館、広島県立美術館、兵庫県美術館、京都国立近代美術館、東広島市美術館、ひろしま美術館などの主任学芸員あるいは主任研究員、ならびに、読売新聞社、中国新聞社の文化・広報担当者などと、展覧会開催可能性

などについて、あくまでも「下準備」として話し合う機会があった。今後も研究進捗と併行してこうしたアクションの継続も必要であろう)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

1. Hideki KUWAJIMA, “A Catholic Painter James Barry and the Portrait of Wounded Ireland: the Colonial Sublime or ‘Celtic’ Sublime”, in: *Final Book of the 7th International Conference of Eastern Aesthetics* (『第7回国際東方美学会議報告書』), Yeungnam University, Korea (韓国・嶺南大学), 2015 (平成27年)(刊行予定、現在「印刷中」)。

国際会議報告書、査読なし。

2. 桑島秀樹「漱石の夢、ホイットラーの夢 幻影のチェルシー、あるいはカーライル」, 京都国立近代博物館編『視る』第474号, pp. 6-8, 平成27年1月。

国立研究機関紀要(ニューズレター), 査読なし。

3. 桑島秀樹「E・パークのカレッジ在学期におけるダブリンの憂鬱あるいはバリオア幻想と文芸趣味の実験的醸成 キルデアの親友クエーカーR・シャクルトン宛書簡から」(単著), 日本アイルランド協会編『エール(アイルランド研究)』第33号, pp. 195-213, 平成26年3月。

国内全国学会雑誌・査読あり。

4. 桑島秀樹「パトロン政治家パークを描くジェイムズ・バリー 忘れられた十八世紀アイルランド人画家の葛藤」(単著), 『人間科学研究(平成24年度広島大学大学院総合科学研究科紀要)』第7巻, pp. 1-24, 平成24年12月。

国内大学紀要・査読あり。

[学会発表](計 4件)

1. 桑島秀樹「渡英以前、ダブリン・トリニティ・カレッジ期のパークの交遊

と 感性 『改革者 (The Reformer)』
刊行に至るまでの精神的遍歴」(単独)
日本イギリス哲学会第 48 回関西西部会例
会、平成 25 年 7 月 20 日(於 キャンパ
スプラザ京都・京都大学サテライト講習
室)

2. 桑島秀樹「親友シャクルトン宛書簡
にみるカレッジ期のバーク バリトア幻
想、あるいはダブリンの憂鬱」(単独)
日本アイルランド協会・2012 年度アイル
ランド研究年次大会、平成 24 年 11 月 24
日(於 滋賀大学)

3. 桑島秀樹「ダブリンの光と影 古
地図と古新聞にみる首都の変貌」(単独)
広島・アイルランド交流会第 8 回例会(講
演) 平成 24 年 10 月 18 日(於 広島市
留学生会館)

4. 桑島秀樹「十八世紀アイルランド人
画家ジェームズ・バリー カトリック刑
罰法と ケルト的崇高」(単独担当)
広島芸術学会第 26 回大会シンポジウム
「芸術と地域」(コーディネーター:松田
弘、基調講演:金田晋)パネル報告、平
成 24 年 7 月 21 日(於 ひろしま美術館
講堂)

{図書}(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑島 秀樹 (KUWAJIMA HIDEKI)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号: 30379896